

川崎病の治療と長期管理に関する研究
 主任研究者 加藤裕久（久留米大学小児科）

研究要旨 川崎病急性期における細胞接着分子（セレクトインファミリー）の動態が明らかになり、冠状動脈障害の予測因子となりうる事が明らかになった

A.研究目的

細胞接着分子は、炎症の過程において重要な役割をする事が知られている。細胞接着分子であるP-セレクトインは血小板、E-セレクトインは血管内皮またL-セレクトインは白血球に主に存在する。川崎病は全身の中動脈を中心とした血管炎で血管内皮に障害を持つことが知られている。本研究の目的は川崎病急性期における細胞接着分子の動態を明らかにし、それらが川崎病による冠状動脈障害の予測因子になり得るかどうかが検討することである。

B.研究方法

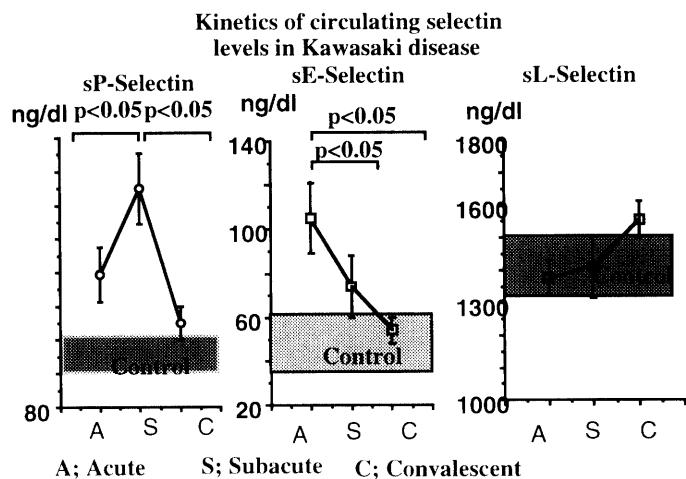
対象は川崎病児30例および年齢を一致させた対照児10例である。川崎病児は、後方視的に以下の2群に分類した。1群（冠状動脈瘤を生じた12例）、2群（冠状動脈瘤を生じなかった18例）とした。川崎病児においては、細胞接着分子であるP-セレクトイン、E-セレクトイン、L-セレクトインは、ELISA kitを用いて急性有熱期（3-7病日）、亜急性解熱期（9-20病日）、慢性期（29-75日）に測定した。

C.研究結果

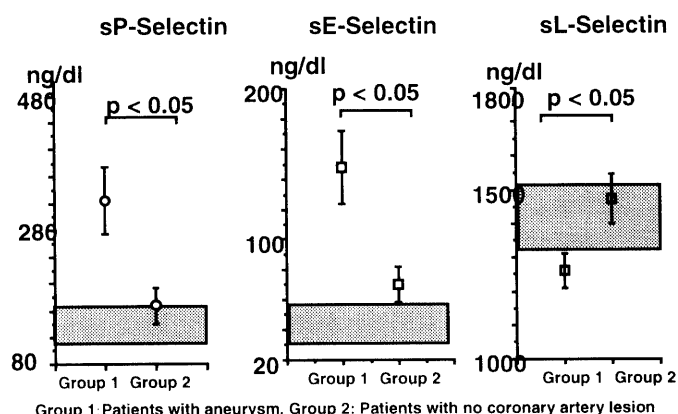
川崎病における細胞接着分子の動態はP-セレクトインは亜急性期に最も高い値を示し、E-セレクトインは急性期に最高値を示した。L-セレクトインは、慢性期に上昇を示した。1群と2群間の比較では、急性期、亜急性期においても、P-セレクトイン、E-セレクトインは、冠状動脈瘤を持つ患児において有意な上昇を認められた。

D.考察

川崎病において病態生理の解明および治療戦略を立てる上において血管炎の重傷度を定量的に正確に把握することは重要である。現在までに報告されている各種の炎症マーカーは、必ずしも冠状動脈傷害の予測因子とは、なりえてなかった。しかし、セレクトイン、特にE-セレクトインは急性期より有意な上昇を示し冠状動脈障害の予測因子となり得る可能性が示唆された。



Plasma levels of adhesion molecules in acute phase of Kawasaki disease



E.結論

細胞接着因子（セレクトインファミリー）は、川崎病における冠状動脈障害の予測因子となりうる事が示唆された。

F.研究発表

2.学会発表

Ishii M, Ikeda H, Sugimura T, Iemura M, Akagi T, Kato H. Soluble form of P-, E-, and L-selectins in children with Kawasaki disease 71th Scientific Session American Heart Association, Dallas, 1998

G. 知的所有権の取得状況

1.特許取得

なし

2.実用新案登録

なし

3.その他

なし

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨 川崎病急性期における細胞接着分子(セレクチンファミリー)の動態が明らかになり、冠状動脈障害の予測因子となりうることが明らかになった